２０２５年４月の総評に代えて

○林　　桂○

●松下　誠一●（東京都　22歳）

春の日の暮れてしばらく
鍵を挿す音の速さに父だと分かる

【評】父の帰宅を、いち早く解錠の癖で察知する。神経を張り巡らして生活しているのだろう。生活の隅々まで熟知しながら生きているのだ。しかし、作者は特異なのではなく、案外私たちの生活ぶりも同じようなものかもしれない。

●詩央えみる●（大阪府　24歳）

この部屋で僕が泣く日も笑う日も
俯いているスタンドライト

【評】一行目は日々の生活のさま。二行目は生活の場の点景。「俯いている」のは、使用するための調整によるものだが、作者の姿の投影にも見えてくる。感情の起伏はあれ、何事も起こらない日常の象徴のようでもある。

●中原紘●（山口県　21歳）

心臓の位置も知らずに
丸まった猫は一つの臓器のように

【評】私たちは身体的なパーツもその機能も知って生活している。それを当たり前のように思ってもいる。しかし、猫のようにそうした情報を持たずに生きているものにとっては、最後まで身体は一つのものと認識されているだろう。「一つの臓器のように」は、そうした感覚を言い止めている。

●蝸牛●（奈良県　36歳）

不機嫌な鉛筆削り花の雨

【評】「鉛筆」「削り」なのか「鉛筆削り」なのかで不機嫌の主体が違ってくる。ともあれ、花に雨降る新学期の憂鬱を反映しているだろう。いまや鉛筆も鉛筆削りもほとんど無縁な学校生活になってはいる。しかし、経験者には、そこに生活の集約を見る作者の目は鋭さを感じさせる。

●青粒●（神奈川県　24歳）

この街できっと知り合う客人を
もてなすために揃える食器

【評】新しい街で新しい生活を始める。「客人をもてなすために揃える食器」に、その生活への期待が込められている。「食器」に焦点を絞ることで印象鮮明な作品となっている。

●ムクロジ●（群馬県　17歳）

花陰にカレーは飯をまわりこむ

【評】「カレーは飯をまわりこむ」は、俳句的な修辞として巧みだ。花見のような行事で供されたカレーライス。そのよそるさまを「カレーは飯をまわりこむ」で表現している。修辞で読ませる作品を書く十代。才能や恐ろし。

●深谷　健●（埼玉県　26歳）

春の駅僕らパステルカラーめく

【評】「パステルカラーめく」の単純化された色調の表現に、春の光の輝きが写し

取られている。「駅」、「僕ら」と人混みの色調として書かれていることも世界を広げている。

●平松　泥沸●（兵庫県　37歳）

少年とケンサキイカの青い旅

【評】少年が持つのは、剣でも模造品でもない。ケンサキイカである。あるいはケンサキイカと連れだっているのかもしれない。「青い旅」は、海の旅なのか青春の旅なのか、もちろん判然としない。しかし、どこかユーモラスで、非現実的でファンタジーの世界は、一読魅了される。不思議な作品だ。

●ほしはかせ●（群馬県　59歳）

春雨
名辞　時刻
くうくう
茴香油

【評】高柳重信の尻取り俳句の形式コピーであるが、よくできている。脚韻を次の句の頭韻とする方法で韻律を意識しながら、その内容はできるだけ繋がらない

ように発想を展開する。「くうくう」のオノマトペが、その両方に関わっていい役割を果たしている。

●松浦やも●（東京都　17歳）

スプーンの窪みに
舌を沿わせれば
いつか
かなしくなるためのひと

【評】「かなしくなるためのひと」という悲観的な世界観が提示されている。一行目、二行目はそれに実感を与える記述となっている。私たちは、誰も悲しみを通過せずには生きられないだろう。その意味では、誰も「かなしくなるためのひと」なのである。

●ハバカリ　タケヂ●（神奈川県　21歳）

はるってなんか
しにづらくってきまずい
なんかいぬがぽかぽかだし

【評】三行目の「なんかいぬがぽかぽかだし」がいい。私たちの心を癒やしたり、自傷的な想いを踏み止まらせるのは、案外

こうした小さな手触りであったりするだろう。

●林　淳●（大阪府　27歳）

アスファルト　鉄が轟く音が止む
鳥が工場で子育てしてる

【評】一行目が示す工場地帯の殺伐とした環境の中でも、鳥は生活し、子育てをする。適応した生活ぶりと言えばそれまでだが、その逞しさに、作者は元気づけられているのだろう。思えば、人もさして変わらない生き方である。

●小川　未夜子●（石川県　29歳）

ヨーグルトをジャムで汚して
復職が成らないままの
暮らしが永い

【評】「ヨーグルトをジャムで汚して」の「汚して」に、作者の思いは託されている。「交ぜる」のではないのだ。作者には、日々の生活ぶりそのものなのだろう。